

ジョージ・ケナン『シベリアと流刑制度』

序 文

倉 田 稔

目 次

はしがき
著者について
序 文
目 次 [第1巻]

はしがき

ここに訳出する書は、帝政ロシア時代のシベリアと流刑制度に関する、世界で最も有名な書である。—ただし、ここでは原著者序文の訳出だけである。革命以後のソ連の流刑制度については、アレクサンドル・ソルジェニツィーン『収容所群島』を挙げてよいであろう。

本訳書はその上、シベリアの社会・歴史・地理・風俗・習慣、その他を含むシベリア論でもある。そのため、シベリアに興味を持つ人に喜んでもらえるであろうし、そればかりではなく、ロシア史を学ぶ人にとって大いに有益である。

この書は旅行記であり、その点でも極めて有名である。叙述は、一般大衆も分るように、専門以外の人に読めるようになっている。なぜなら著者はジャーナリストである。本書は実は、色々性格づけする必要がない。つまりこれを読むことだけで楽しいであろうし、話が愉快であり、そして同時に物知りになる。

原本は、George Kennan, *Siberia and the Exile System*. 2 vols. New York 1891. である。

訳者注は、(数字) または (訳注) で、訳者の補いは、[] で示した。

なお第1章以降も順次訳出を行っており、本誌に発表しようと考えたのであ

るが、多大な紙数のために取り止め、その代わりに成文社^(注)から刊行することとした。

著者について

著者ジョージ・ケナンは、1845年、オハイオ州の下級事務員の家に生まれた。生来勉強好きで、大学に行きたかったが、資力がないので断念し、12歳の時から、生活のために働いた。電信会社の局員を振り出しに、測量隊員、冒険的外国旅行、生命保険会社の事務員、原稿書き、講演、雑誌新聞通信員、従軍記者(1898年、キューバ。1904年、乃木将軍の旅順攻略軍)等々、次から次へと目まぐるしい活動の生活を続けた。従って彼の教養は、すべて独学によるものであった。体力は強健、意志はあくまで強固、目標を良く意識し、大胆、敏速で、細心であり、正確な事実を愛好し、観察は細密で、真実の前には自分を胡麻化さなかった。

彼は生来、冒険旅行が好きであったが、職業の関係から、ロシアの自然と社会に興味を持ち始めて、五度ロシアに旅行した。

第一回目は、1865年～8年。ウェスタン・ユニオン電信社会の電線架設の準備のため、20歳の青年として、探検隊に加わり、カムチャッカからペテルスブルグまで、未開の荒野六千マイルを踏破し、零下50～60度の広野にキャンプして、死線をさまよったこともあった。この旅行の成果は、『シベリアのテント生活』1870年、である。

第二回目は、1870年～71年。コーカサスへの冒険旅行であり、この旅行が、また彼を鍛練した。彼はこうして、ロシアの風土・気候や風俗・習慣に慣れ、ロシア語の他に、コーカサス、カムチャッカ等々の方言にも精通した。

第三回目は、1884年の秋、サンクト・ペテルスブルグ[今のレニングラード]とモスクワを訪れた。本書のシベリア旅行の予備的調べのためであった。

(注) 成文社。東京、中野区中野 1・41・1, 小林マンション2F。

第四回目は、1885年～86年。これが、本書として結実する。

第五回目、1901年。フィンランドからロシアに入ったが、今度は内務大臣に嫌われ、監視人に守られて、国境から放逐された。

さて、第四回目の旅行記は、『センチュリー・マガジン』*The Century Illustrated Monthly Magazine*の1887年12月号から、毎月連載された。『シベリアと流刑制度』は、1885年5月から、挿し絵入りで同誌に掲載された。これが、1891年にまとめられて単行本になった。^(注)

序 文

シベリア⁽¹⁾のあまり知られていない所を探検し、その探検によって、流刑制度を念入りに調べようという考えは、1879年に初めてはっきりした形をとった⁽²⁾。この国に二年間滞在し、その後、サンクト・ペテルスブルグ [=今のレニングラード] へ陸路5000マイルの旅ができて観察したことから、シベリアが、有能な研究者にはとても興味深く、将来有望な調査の地だと思えた。ほぼ3世紀の間、その全部か一部を占有したロシア人には、シベリアはもちろん慣れ親しんだ土地であった。だが平均的なアメリカ人には、その当時、中央アフリカやチベットのように、殆ど「知られざる世界」であった。1881年にアレクサンドル2世 [1818年生まれ。1855年から皇帝] が暗殺され、多くのロシア革命家がトランスバイカルの鉦山に流刑されたことで、シベリアへの興味が増した。そして流刑制度を現地で調べるだけでなく、そのような調査が成功すると思えた帝国の唯一の場所、つまり革命家たち自身が追放された地で、ロシア革命運動を調査したいという気持を、募らせたのである。サンクト・ペテルスブルグ

(注) 大塚金之助『解放思想史の人々』岩波書店 1949年、172～5ページ(『大塚金之助著作集』第四巻、岩波書店、に再収録)に殆どもとづき、一カ所改善したもの。

(1) 以下の訳は、宮尾政志氏が素訳し、小生が改訳したものである。

(2) 19世紀最後の四分の一の世界の関心の一つは、ロシアにつきつぎとおこったテロリスト事件と流刑とであった。(大塚、前掲書 174ページ)

とモスクワの町でニヒリスト⁽³⁾たちを探すと、興味を感じたその政治的事件や社会現象の説明をそこで探究することは、私には見込みのない仕事だと思えた。というのは、1878年から79年の革命劇⁽⁴⁾の主役は、たいてい既にシベリアにいたのである。そして、もし帝国の官憲がまだ逮捕できない人をヨーロッパ・ロシアで見付けられないならば、私にそのような事ができるわけではないのである。だが、シベリアでは、恐らく流刑されたニヒリストと接触できるであろうし、どこかで私が求めている情報を入手できる、と思った。

状況のために、また私が行いたかった長期の旅行の時間と資金が足りなかったので、1884年の夏まで旅行を企てられなかった。そのとき『センチュリー・マガジン』誌の編集者が、私の計画に興味をもち、その雑誌のためにシベリアへ行き、調査の結果を載せてもらいたいと提案した。そこで私はただちに、資料集めと、ロシア政府が道中を邪魔しないかどうかを確かめるために、サンクト・ペテルスブルグとモスクワへむかって予備旅行をした。私は10月に帰国したのだが、十分満足した。というのは、自分の計画が実行でき、シベリアでは隠匿する必要が何もなく、私の記録した限りの筆記帳はロシア政府に好感をもたせ、また友好的な調査家がそれなりに期待する便宜が皆保証されるからであった。

シベリア流刑制度とロシア政府の政治犯の取扱いについての、私のその当時の考えは、1882年にニューヨークのアメリカ地理学会で行った講演と、それによって起きた新聞紙上の論争で、十分率直に明らかになっている。その頃、私はこう信じていた。ロシア政府と流刑制度を、ステープニャークや⁽⁵⁾クロポトキン

-
- (3) 日本で普通「ニヒル」が意味するものとは関係ない。人民主義者、革命家のこと。
- (4) 例えば、1878年に、ヴェーラ・ザスーリッチがトレポフ長官を狙撃した。1879年に、「土地と自由」派が、「人民の意志」派と「土地総割替」派とに分裂した、など。運動が最高権力にたいするテロ闘争に移った。「人民の意志」派は、ツァーリに死刑を求めた。
- (5) 本名 クラーフチンスキー (1851～96)、秘密結社チャイコフスキー団に入り、1873年に、ナロードニキ運動に参加、逮捕、逃亡、亡命し、その後、帰国する。非

公⁶⁾のような著述家がひどく誤って伝えてきたし、シベリアはアメリカ人がつね日頃想像しているほど恐ろしいところではないし、それに、ヘンリー・ランステル師の刊行したばかりの本で、シベリアの鉱山や刑務所を叙述していることは、恐らく真実で正確だと。口にこそ出さないが、私はまたこう信じていた。長い間ロシアを恐怖と憂鬱の状態にしてきたニヒリストやテロリストや政治的不満家たちは、アメリカでよく知るようになった無政府主義者の典型であるが、概して無分別で頑迷な狂信家であると。要するに、私の先入観はみな、ロシア政府に好意的であり、ロシアの革命家たちには好意的ではなかったのである。私がこれを強調するのは、その当時の見解が本質的に特別に重要であったからではなく、調査者の先入観とか個人的な偏見を知っておかないと、調査の結果が正しく評価できないからである。またそれを強調するのは、なお一層の理由からである。つまりロシア政府の私にたいする好意的な態度、私が刑務所と鉱山を視察するのを許可されたこと、それに私の行動と人との接触でシベリア地方当局が私を嫌疑の対象にして当然であっても、逮捕、抑留、投獄をされなかったこと、それらは多少ともこの先入観のお蔭なのである。政府の認めた見解にまだ賛成していない旅行者が、流刑制度を調査するという公然の目的でシベリアへ行くことが許されるのは、極めて疑わしい。またはもし許されても、その旅行者が最も危険な階級である政治犯たちととても親しく交わっていることが露見した時に、のっぴきならないごたごたから逃れられないであろう。私

合法紙『土地と自由』を編集。1878年、憲兵隊長メゼンツェフを暗殺し、亡命、イタリア・スイスへ。ロンドンで事故死。著作『アンダーグラウンド・ロシア』ロンドン1882年（邦訳あり）。その他。

- (6) 公爵ピョートル・アレクセーヴィチ・クロボトキン（1842～1921）。有名なロシアの無政府主義者。数回にわたって、探検隊に加わり、東シベリアと満州の地理学的調査をした。シベリア地理学の発展に寄与する。例えば、『氷河時代の研究』1876年。バクーニンと会い、無政府主義となる。ナロードニキの重要メンバーとなり、無政府主義を宣伝。逮捕、亡命する。アナーキズムの指導的理論家になる。1917年2月革命で帰国。著書、『革命家の手記』1899年〔邦訳あり〕、その他多数。邦訳全集あり。

は、警察や、人里離れたシベリアの村の疑い深い地方役人と度々小競り合いをしたが、ロシア内務大臣の手紙を携えていたばかりに、略式逮捕や投獄あるいは、帝国からの監視付追放や、ノートと文書資料すべてを失うはずの身体検査・荷物検査から救われたのである。その手紙は、嵐と緊急の時に頼みの綱だったのであり、もし、かなりのおびただしい敵と対立しているロシア政府を、私が公然と擁護していなかったならば、決して私に与えられなかったと思う。そしてたとえ刑務所と流刑制度とが予期していたより悪く、想像していたよりも酷いと解っても、個人の自尊心や希望は一貫しているのだから、誤っていたとは恐らく告白しないだろうと思われなかったら、その手紙はもらえなかったろう。この考えがどれほど根拠があったのか、どの程度まで私の先入観が事実と一致していたのかを、この著書で示そう。

とはいえ、つぎのことははっきり理解していただきたい。つまり私が、ロシア社会を全体として完全で包括的に解明しようとしてはいないし、ロシア政府が領有する広大な土地のすみずみまでを概観したり、さらに一億の人々の複合した国民生活をなす全ての複雑で異質な、相互に連関する事実と現象を、秩序だてて調和して説明しようとは狙っていない。これほどの重要な仕事は、私の能力を越え、自分に課した限界をずっと越えてしまうだろう。私が目指したことは、すべて、風景、民衆、シベリアの風習を、鮮明で生き生きした印象で読者に伝え、流刑制度を念入りに調べた結果を記録し、さらに、私が見た事実や性質や事件にもとづいて解明する必要があるかぎり、ただそのかぎり、ロシア政府のこの主題にたいする態度を考察することである。

『センチュリー・マガジン』誌で発表したシベリアと流刑制度の記事に、幾つか批評がなされたが、それらは、明らかに次の仮定に基づいていた。つまり、国民性の特殊分野を概観することは、きっと不完全で、誤解を与えるにちがいない、だから公平な調査者ならば、他の多くの分野から多数の無関係な事実と現象を取り入れて補うべきだ、というものである。

批評家たちは言った。「貴方の記事は誤った印象を与える。ロシアの刑務所、無差別逮捕、それに多くの人を裁判なしでシベリアに追放するという、貴方の

記述は、すべて本当かもしれない。だがロシアには、それにもかかわらず、平和で幸福な家庭が数多くあり、そこでは、もし合衆国に住んでいたらそうであるように、父も兄も逮捕されシベリアへ流刑される危険にはさらされていない。ロシアは、要注意人物、囚人、看守等が住む広い刑務所ではない。そこは、教養があり上品で心の優しい人々で溢れているのである。そして国の徳をすべて体現する皇帝〔時の皇帝は、アレクサンドル3世、1881～94年〕は、最愛の臣民の幸福と繁栄を増すこと以外、高い人生の目的を持っていないのである。

この様な批評には明確に答えよう。それは、批評した仕事の目的と範囲を完全に誤解している。私がロシアへ行ったのは、幸福な家庭を観察しにでもなく、気の合った心やさしい人々と知り合いになるためでもなく、またツァーの国民的徳を賞賛しにでもなかった。

私がロシアへ行ったのは、刑罰体系の機能を研究し、流刑者、追放人、犯罪者と知り合いになり、また政府が東シベリアの刑務所や鉱山でその敵をどう扱っているのかを確かめるためであった。議論のために仮に、ロシアには幸福な家庭が幾多もあり、教養ある心優しい人々が帝国には沢山おり、それにツァー〔=皇帝〕が妻と子供を献身的に愛しているとしよう。だが、これらの事実が、ヤクーツ地方の潰れそうな宿営地の衛生状態や、カラの鉱山で若く教養ある女性が鞭打ち刑で死んだ事と、何の関係があったのか？ サクト・ペテルスブルグの幸福で心暖かい家庭を、トムスクの流刑者護送刑務所での発疹チフス熱の流行と比較するのは、公平不偏の証ではなく、むしろ筋の通らない見解だと証すことである。公平さと不偏さは、どんな特殊な分野でも調査者に要求するのだが、それは、然るべく適度な釣り合いをとり、偏見なく、その選んだ分野で集めた重要な事実をすべて入念に述べ、それから、集めた事実から正当と思える結論を引き出す事である。彼の研究は、百科全書的展望がないかもしれない、しかし、事の性質上、それがなされるならば、十分に正確であり信頼に足らないという理由はない。合衆国でのインディアン問題の調査は、その民族の多様で複雑な生活の小さな部分を、必ず問題とするであろう。だがそれにも拘らず、ブライスの『アメリカ国家』のように、その限度内で、公平

に完全に行われるであろう。多分それは、暗い情景を示しただろう。だが我国の大統領が道義的な人で、自分の子供には善良であるとか、ニューヨークの数多くの幸福な家庭が金搜索者たちによって家から追い出されたことがないとか、あるいはボストンのコモンウェルス通りの住人が、未成年に酒を売ったことなど決してない上品で教養ある人々であるということを示して、インディアン問題に光を当てようとするのは、非論理的だし馬鹿げている。もし情景の暗さを和らげる積りならば、そのしかるべき方法は、情景を暗くしている弊害を除くために何がなされたかを示すことであって、その国の、条件の全く異なる他の場所でその情景を快活で生氣あるものとして描こう、とすることでは決してない。

本書で私は、政府と流刑者の双方を公平に論じようと試みた。もし政府の主張が必ずしも望ましい程十分に説明されていないとすれば、それは単に、シベリアとサンクト・ペテルスブルグ双方で私が情報を問い合わせた大部分の政府役人が嫌な顔をして話して、私が問題を追求できなくなったり、さもなければ、彼らの言うことが単に馬鹿げたとしか思えない見えすいた不合理なことをして、私を騙したからである。だが、シベリアの刑務所と流刑制度の機能に関する私の情報の大部分、恐らく二分の一以上が、公式情報から直接得られたものであり、それにそのとても僅かな部分、恐らく五分の一以下が、流刑者や囚人たちの口述に基づいているという事は、後に分るだろう。私は、シベリアの刑務所の衛生状態と流刑者たちの死亡率とを示す、ロシア刑務所と医療部の山のような統計報告と、同様に、シベリアの新聞十年間の綴じ込みを調査して得た多量の情報を、分類された事実を集めた形で追加した。これらの統計は、事柄を実際よりもずっと好ましい状態として表すやり方で、いつも「手を加え」られていた。それを、シベリアの流刑行政の正直で知的な官吏たちによって私は確信した。しかしそれらは、入手できる最良の公式資料である。もう一つの追加には、アヌーチン総督がツァーに宛てた二通の報告書がある。その余白にツァーの書き込みがある。つまり、内務大臣がロシアとシベリアの作家たちをどう処遇し、検閲局がロシアとシベリアの雑誌をどう処理したかという事実の

集録と、少量の革命文書の収集、革命家たちに対する政府の法律・規則、それに命令の集録、最後に、私が知っている限りのシベリアと流刑制度とに関するロシア文献の目録である⁽⁷⁾。

この序文を終える前に、ヨーロッパ・ロシアとシベリアの旅を通して、私の仕事を激励し、調査に協力し、最も重要な部分の資料を下さった多くの友人、知人、好意を寄せて下さった人々に、衷心よりお礼の言葉を述べたい。その幾人かは政治犯であり、自分たちの生涯の歴史を私に書かせたので、まだ残っている悲惨な将来をさらに危うくさせた。また幾人かは流刑庁の役人であり、私の道義心と分別を信じてくれて、自分の長い体験の結果を余さず提供した。彼らの幾人かは、正直で人間味ある、監獄の官吏であり、監獄制度の悪弊を再三教えてくれたあとで、政府と世界の注意を向ける最後の有効な手段として、ついにそれを教えてくれたのである。これらの人々の大部分は、あえて名前を挙げなかった。その人々やその尽力は、彼らの名前を記憶に留め、賛える価値がある。しかし、率直に述べた意見を「不逞」の印と見たり、事態を改善しようという努力を犯罪として罰する国に生きているのは、彼らも不運である。彼らがこのような政府の下に住んでいる今、このような人々の名をあかすことは、嫌疑と監視の対象とするだけである。従って、彼らが幸福のために今も実行している僅かな力を奪うことになる。だから、彼らの信義、親切、助力に感謝の意を表すためにできるのは、彼らを与えて、彼らがそれを使ってもらいたいと思う情報だけを、人間性、自由、善き政府のために使うことである。ロシアとロシア人民に、私はこの上なく暖かい愛情と同情を寄せている。そして私のシベリア調査の結果の、中庸があって吟味された報告が、もしこの国と国民をもっとよく世界に知らせる事ができ、また、「神は天にあり、ツァーは遠くにある」多くの「不遇な人々」を、僅かでも改善することが出来たならば、私の生涯で最も困難な旅と最も辛い体験が、報われて余りあるであ

(7) 以下、著書は、ロシア文字を英字に書き表す規則を、1ページ余りにわたって述べている。しかし、これが訳稿であり不要となるため、略す。

ろう。

ジョージ・ケナン

目 次 [第1巻]

- 第1章 サнкт・ペテルスブルグからペルミへ
- 第2章 シベリアの国境を越えて
- 第3章 トボルスクの花咲く平原
- 第4章 チュメーニの囚人護送刑務所
- 第5章 シベリアの囚人船
- 第6章 郵便駅旅行の最初の印象
- 第7章 キルギス大平原
- 第8章 政治的流刑者との最初の出会い
- 第9章 アルタイ山の馬車道
- 第10章 政治的流刑者の二つの居留地
- 第11章 行政手続による流刑
- 第12章 トムスクの県と市
- 第13章 トムスクの囚人護送刑務所
- 第14章 政治的流刑者たちの生涯
- 第15章 大シベリア道
- 第16章 宿営監獄による追放